

各地の音楽活動

北海道

八木幸三

札幌交響楽団首席指揮者マティアス・パーメルトが、今年度の定期演奏会の各指揮者へ「作曲家が作曲家に出会うとき……何を感じ、何を与えたのだろうか？」というテーマを出した。彼自身は5月定期で、プーランクの「2台のピアノのための協奏曲」を取り上げ、兄玉麻里、桃姉妹による2台のピアノが、対照的なピアノリズムで左右交互に閃光を放ち、第1楽章での峻烈なりズムによるストラヴィンスキーへのオマージュや、モーツァルトを想起させる第2楽章などで、作曲者の意図を精緻にピアノと管弦楽に絡ませていた。8月定期ではブラームス作品が2曲、1月定期ではマルタンの「7つの管楽器とティンパニ、打楽器、弦楽のための協奏曲」で、同団首席奏者たちのアンサンブルが楽しめた。名誉音楽監督尾高忠明は4月定期で「変奏曲」をキーワードに、このテーマに応え、ブラームスの「ハイドンの主題による変奏曲」では、「性格変奏」としての持ち味を見事に引き出していた。友情客演指揮者である広上淳一は2月定期でジャン＝エフラム・バヴァゼを迎え、2つのピアノ協奏曲をはじめオール・ラヴェルを、12月定期ではマーラーの「交響曲第10番」という意欲的な曲目で生気を放った。3月定期では、俊英クシシュトフ・ウルバンスキが、母国ポーランドの巨匠ペンデレツキの「広島への犠牲に寄せる哀歌」を暗譜で指揮し端正な響きを創出。札幌とは、40年以上にわたる関係を保つユベール・スダーンが、6月定期で竹澤恭子と供にプロコフィエフの「ヴァイオリン協奏曲第2番」を熱演。9月定期ではハインツ・ホリガーが自身の生誕80年記念と銘打って、自作自演を含めた曲目で多彩な才能を披露。前首席指揮者マックス・ボンマーは10月定期で、バッハの大作「ヨハネ受難曲」全曲を壮麗に奏でた。長内勲をはじめとする指導陣が率いる札幌合唱団は、声部間の精緻なアンサンブルで秀逸だった。11月定期では川瀬賢太郎の指揮で、交響詩「はげ山の一夜」原典版やストコフスキー編曲による「展覧会の絵」など、聴き慣れたものとほっと味違うムソルグスキー作品が楽しめた。

30回目となる「パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) 2019」は、例年、会期の終盤に行われていた「ビクニックコンサート」と「GALAコンサート」を中盤に配し、30回を記念した「プレミアム・コンサート」では、以前、芸術監督として関わっていた名匠C・エッセンバッハが、マーラーの交響曲第8番「千人の交響曲」を豪快に指揮した。また、第1回PMFに創設者L・バーンスタインの招きで参加した女性指揮者M・オルソップが29年ぶりに首席指揮者として登場した。札幌出身の作曲家、津田元によるオリジナル・ファンファーレが高らかに鳴り響いたオープニングコンサートでは、ホルンの名匠、R・パボラークがPMF教授S・ウィリス（ベルリン・フィル）とハイドンの「2本のホルンのための協奏曲」を演奏。さらにパボラークは、ホスト・オーケストラ札幌とモーツァルトの「協奏交響曲」をPMFベルリンの教授陣と共演した。現在PMF修了生が11人在籍する札幌の清澄な響きが、ベルリン・フィル団員の豊饒な音色と調和し、極上のアンサンブルが聴けた。昨年オープンした札幌文化芸術劇場でのPMF初公演は、以前アカデミー生として参加した宮田大がエルガーの「チェロ協奏曲」を情感豊に演奏。米岡指揮者C・ナツがドヴォルザークの「交響曲第8番」をダイナミックな音楽で推進させ、同劇場の機能性を実感させた。札幌でのPMF最終公演で、芸術監督V・ゲルギエフが遂に登場。彼が委員長を務めるチャイコフスキー国際コンクールの木管部門に優勝したフルートのM・

デョーミンを伴ってイバールの「フルート協奏曲」を演奏。デョーミンの玲瓏な音色に驚嘆した。続くショスタコーヴィチの「交響曲第4番」では多彩な楽想が次々と表出し、それぞれのパートが巨大な建造物を構築。ゲルギエフのカリスマ性で、この作品を昇華させた。大きな節目を終えたPMFは、ゲルギエフの滞在期間の短さなど課題はあったものの、世界的な教育音楽祭として確実に実績を積み上げていた。

道内オペラ界では、札幌文化芸術劇場がオペラファン拡大に効果を発揮している。北海道二期会が3月に公演した「椿姫」は、二日間満席となり、タイトルロールを務めた佐々木アンリと岡崎正治、岡元敦司をはじめとする出演者、二期会合唱団、札幌交響楽団など地元音楽家が高いレベルのステージを作り上げた。8月には、同劇場と全国4劇場との共同制作で「トゥーランドット」を公演。大野和士の指揮でバルセロナ交響楽団と合唱との分厚い音響がホールを満たし、大掛かりなセットと意表を突く王妃の宿命的な結末が話題を呼んだ。これまでオペラ団体を支えてきた札幌市教育文化会館は「Kyobunオペラ」として北海道二期会創立55周年記念のガラ・コンサートと「道化師」を公演（11月）。また年末にはLCアルモニーニカが、ヒンデミットの「ロングクリスマスディナー」と飯田隆の「真説カチカチ山」の2本立てで意欲的なステージをつくり、さらに井出祐子が企画プランナーとなった「ドラマティックコンサート」も好評を得た。他に札幌室内歌劇場が「オルフェオとエウリディーチェ」、オペラ・ファクトリー北海道が「道化師」、札幌でバタフライ実行委員会が、それぞれ独自の持ち味で各会場に適したステージを作り上げていた。

長年にわたり声楽を指導してきた青木恵子の門下生からなる「めぐみ会」が60周年記念演奏会、また多くの声楽家を育てた雨貝尚子が主宰する「声楽研究会カントール」が第40回記念演奏会、さらに笹圭子が代表する「北海道日本歌曲研究会」が創立15周年記念演奏会と、道内の声楽界を牽引した団体が節目の年を迎えた。服部麻実がチャイコフスキーなどロシア、東欧の歌曲、阿部雅子がモンテヴェルディなどのバロックオペラ、長島剛子がゲーテの詩による歌曲など、それぞれ特徴的なステージを展開。81歳を迎えた田中則子は脳梗塞を克服し、日本歌曲によるリサイタルを開催した。

ピアノでは、札幌出身の遠藤郁子が日本ポーランド国交樹立100周年記念公演、樋口英子がデビュー30周年のリサイタル、影山裕子は2夜にわたり「クララの200歳の誕生日に」と題し、シューマン夫妻のピアノや歌曲などによる「シューマンアード」を開催した。

札幌ではフルート演奏が盛んだが、9月に八條美奈子、立花雅和、細野雅子が立て続けにフルート・リサイタルを開き、10月は札幌フルート協会会長の阿部博光がベテランらしい味わい深い演奏を聴かせた。11月には若手フルート奏者按田佳実理のリサイタルと6人のフルートアンサンブルグループ「フルートレポリユーション」が「宇宙」をテーマに斬新なステージをつくった。かつてHBCジュニアオーケストラに在籍していた人気ヴァイオリニスト成田達輝、西本幸弘、川村拓也がそれぞれ質の高いリサイタルで注目を集めた。新進演奏家育成プロジェクト・リサイタル・シリーズSAPPROでは、井畑志保が、フランス近代のフルート作品などで心地よい音色をホールに放ち、土谷香織が、イタリア歌曲やオペラアリアで清澄なソプラノを聴かせた。室内楽では、札幌の岡部亜希子をはじめとする同団弦楽器奏者がピアニスト入江一雄を迎え、さらにピアニスト浅沼恵輔を中心に札幌コンサート・マスター田島高宏ら団員が、それぞれブラームスのピアノ四重奏曲第1番を聴かせたのが印象に残った。この曲は、札幌定期でシェーンベルク編曲の管弦楽版でも聴くことができた。日本アレンスキー協会は、札幌で創立10周年記念の講演会とコンサートを開催し、ロシア音楽から演奏機会の少ない作品が紹介され有意義な会となった。